

百怪—恋の怪 1 8 話—

annmin

「魅入られ」

知人の話。

“狐に好かれている”と自称する友人がいたらしい。

運は悪くないというか、かなりの事故に遭ってもカスリ傷だったり、お金が入用の時に臨時収入があったり、という程度のものだったらしいが。

そんな彼をある時ツアー旅行に誘った。まだ高校を卒業して間もない頃、2泊3日のそれなりに人気のあるツアーだったらしく、参加者も30名を越えていたという。若者向けのツアー企画で、異性との出会いを期待したりと良からぬ動機があった事も確かで、その目的はそれとなく友人に伝えた。

「だったら、俺は行かない方がいい」

その友人はそっけなく答えた。

しかし、数は多い方が向こうも警戒しないし、何より彼はそこそこ顔立ちが良く、いわばエサとしての役割も期待していたのである。

何とか拝みこんで参加する事に同意させたものの、

「後悔するなよ」

と、捨てセリフのような言葉を残し、皆はそのツアーの日を待つ事になった。

当日—

すでにバスの中で異変は起きていた。ツアーそのものに何か問題があったわけではない。

10代後半から20代後半くらいまでの若者、30代はいない。

ただ、ツアー参加者が全員男

だったという事である。

「ツアーを20年ほどしていますが、こんな事態は初めてです……」

添乗員は、呆れたような声で感想を述べた。

女性の比率が少ない、というレベルでは

ない。

全く女性がいないのである。

唯一、その添乗員は女性ではあるが、
少なくとも、彼らの対象年齢ではない事は
確かであった。

「だから言ったのに……」

その後、彼らは2泊3日の旅行を
健全に過ごしたという事である。

「浮気」

ある人とふとした事から、飼い猫の話題で盛り上がった。その時に聞いた話。公共関係に従事しているその人は、自分がまだ25、6の時、20年ほど前の事になるが、と思い出すように語り始めた。

当時、決して顔は悪くなく、また安定した収入もあったが、なぜか恋人が長続きしなかった。

3人目に別れを切り出された時は、ショックのあまり会社を1週間休んだという。

原因がわからない彼は、ある時会社の帰りにヤケ酒を飲み、自宅への帰り道、占い師に見てもらう事にした。

普段はそんな事を全く信じない性格の持ち主であったのだが、何か納得する理由が欲しくて、そんな事をしたのだろう、そう苦笑しながら話した。

お婆ちゃん、と言っていいくらいの占い師から返ってきた答えは、異性運さえ諦めれば、貴方は一生上手く行く、というものだった。

無論それで納得がいくはずもない。ワラにもすぎる思いで、どうにかならないかと占い師に泣きついた。

「猫を外に出してあげなさい。

後は運でしょう」

彼には室内飼いの猫が確かにいたが、それを占い師には話していなかった。アメリカンショートヘアのメスで、値段もさる事ながら今やなくてはならないパートナーとなっていて、もし万が一の事があったら、と彼は頭を抱えた。

「まあ、死ぬわけではないし……

とにかく、やるだけやってみるかって事で」

会社の休みの日に、彼は猫を外に出してやる事にした。

最初は不安でたまらなかったが、
日が経つにつれ慣れ、最終的には自由に
外出させてやるようになった。

「一ヶ月くらいしたら、妙な夢を見てね」
セミロングの黒髪で、細身の20代前半
くらいの女性が彼の前に現れた。

胸元が開いたイブニングドレスを着込み、
日本人離れした顔立ちをしていたが、
その顔に気まずそうな表情を浮かべて、
彼に話しかけてきた。

「内容は細かくは覚えていないけど、
これからも私の面倒を見て欲しい、
貴方も好きにしていから、
みたいな事を言ってた」

さらに一ヶ月ほど経過した頃、飼い猫の
妊娠が発覚した。

子猫が産まれた後、しばらくはその世話に
忙殺されたが、落ち着いた頃に彼に新しい
恋人が出来た。

そして半年もしないうちに結婚まで
こぎつけたという。

「何もかもスムーズにいったんだよ。
どうしてそれまでフラれ続けたのか
わからないくらいに」

現在、そのひ孫にあたる猫が彼の家に
いるそうだ。

「ピンタ」

お寺に来た中年夫婦、その夫から聞いた話。
結婚してもう15年ほどになるが、結婚式の
前夜、奇妙な夢を見たという。

「気が付くと、自分の前に7、8才くらいの
女の子が座っていて」

自分もまた、合わせるようにそれくらいの
年齢になっていた。

向き合うようにして座っていたのだが、
ふと少女が片手をゆっくり横に伸ばすと
いきなり彼を引っ叩いた。

「え？ え？ と思っていたんですけど」
よく見ると、彼女の口には牙が生えていて、
それと対照的に頭上に二本の角があった。
彼を恨みがましい目で見ていたが、やがて
口を開き、

「……ウソつき……」

その目には涙がたまっていた。

何がウソなのか、どうして怒っているのか
わからないで困惑していると、今度はその
彼女の背後に、大人の男性が立っていた。

「だから言っただろう。

あの場所での約束は、忘れられてしまう
ものなのだ」

神主のような格好のその男性は、彼女を
そう言ってなぐさめているようだった。

「しかし、父親としては一回」

いきなり彼の頭にゲンコツを降らせた。
同時に目が覚めたが、頭の痛みは酷く、
翌朝まで残っていたが、結婚式の頃には
不思議と無くなっていたらしい。

ちなみに、その父親と思える男性には
格好以外はいたって普通で、角や牙は
無かった。

「でもホント、約束って何の事だか

覚えていないんですよ」

結婚後、男の子を2人授かったが、彼は
子供たちに、“女の子とうかつな約束は
するんじゃないぞ”と注意している。

「限定」

美容院に勤める男性の話。

元々父親が自営で床屋をしており、その影響で彼もその道へと進んだ。

若い頃の彼は母親似で、たいそうな美男であったそうだ。

十代で店を手伝っていた頃は、看板娘ならぬ看板息子で、彼目当ての女性客もよく来ていたらしい。

その十代後半の頃。

自室で寝ていた彼は、足元に妙な気配を感じた。

首を曲げて視線を向けると、年は10才くらいであろうか、女の子が立っている。

「あー……えっちゃん？」

えっちゃんとは彼の姉の子供、つまり姪で、よく彼になついていたらしい。

家に来た時は一緒に寝る事をせがむので、それで来たのだと思ったという。

「ほら」

と、布団の端を持ち上げる。

入るスペースを開けて、敷布団をポンポンと叩く。

“え……？”

一瞬、戸惑うような声が聞こえたが、ゆっくりと彼女は布団の中に入ってきた。

背中を抱いて、頭を撫でていると、そのうち静かに寝息を立て始め、それを確認すると彼もまた眠りについた。

朝起きるとすでに彼女の姿はなかった。朝食の時、彼は何気なくその事を聞いてみた。

「なあ、昨日えっちゃん来てた？」

両親は首を横に振る。

昨晚の事を話すと、両親の顔色が変わっていくのがわかった。

「ちょっとこっちに來い」

彼は車に乗り込むよう父親に言われた。

いきなりどこへ行くのかと聞くと、それは車の中で話すから、という事だった。車を走らせながら、父親は彼に説明した。何でも若い頃、父親は神の使いである白蛇を殺してしまった事があるという。お寺でお祓いをしてもらった結果、何とか厄を避ける事が出来たものの、もし自分に息子が生まれたら引き継ぐ可能性がある。そういう事態になったらすぐに連れて来いと、そのお寺に言われていたのである。

「そんなまさか」

否定する彼に、父親はその少女の特徴を話し始めた。

「昔の着物を来ていなかったか？

髪は肩から少し出るくらいで、

丸顔で……」

昨夜は半分寝ていた事もあったが、思い出してくるにつれて、それは昨晚見た少女とピタリと一致していた。

そこまで聞くと、さすがに彼も信じざるを得なくなってくる。

お寺に着くと、入り口でお坊さんが待っていた。

すぐに本堂に通され、一通り事情を説明するが、すでにそのお坊さんはわかっていた様子だったという。

「あの時の……そうか。

しかし、これは」

父親は何とかあの時と同じように祓ってくれと懇願していた。

しかし、どこかお坊さんの様子がおかしい。何か困惑しているようだった。

「もしかして、手遅れですか」

彼の方から最悪を想定して質問した。

しかし、返ってきた答えは

「確かに息子さんに憑いてはいるんですが、

このままいけば、守り神になりますよ」

なぜかはわからないが、彼はすごく気に入られており、何の心配も無いという事だった。

拍子抜けした3人であったが、一応お礼を

言って、そのお寺を後にしたという。
後、彼はその少女の夢をよく見るようになったが、夢の中の彼女は“お兄ちゃん、お兄ちゃん”と妹のようになつており、特に怖いとかそういう気はしなかった。それは彼が結婚するまで続いたという。私はその話を道場の師にしてみた。

（道場＝仏教でいうところの修業者の集まる場所。別にどこでもいい）

「人でも何でも、女は若い男に弱いって事だな」

そう言って師は大笑いしていた。

私はこの時、某巨大掲示板の

“※ただしイケメンに限る”

という言葉思い出していたが、口には出さなかった。

「特徴」

とある専業主婦の方から聞いた話。

彼女は相手が4つほど年下で、結婚したのは彼が20の時だった。

「親とか、周りを説得するのに苦労したでしょう、とかよく言われるんですけど。

実は全然苦労しなかったんですよ」

彼女の実家は英会話スクールをやっていて、それだけでも収入の心配はない。

逆玉の輿とまではいかななくても、当面の生活に困る事はなかった。

「苦労したのは彼の説得かな。

“何とか俺もいっばしの職につくまで”
って言って聞かなかったし」

しかし、彼女とその両親はすぐにでも、とGOサインを出した。

彼の両親も大いに乗り気な彼女一家に驚いていたが、そこまで言うのならお願いします、という流れになった。

条件として、ちゃんとした就職先を見つけるまでは、英会話スクールを手伝う事がついたが、それも当然と納得してくれたという。

「普通逆ですよねって笑われて。

でも、両親もわかっていましたから」

彼女の家では子供の頃、中型の雑種犬を飼っていた。

少し日本の犬が混じっていたようで、巻きタイプのしっぽ。

ただ、少し変わったクセがあったという。

「普通にお手をしてくれないんですよ。

父や母にはちゃんとお手をするのに、
私だけ」

私が生まれる前からいたので、ちょっと立場的に思うところがあったのかも、と彼女は話した。

しかし、彼女が3歳の頃にその犬は死んでしまった。

14歳、寿命だったという。

「それからは犬.....ていうかペットは

飼う事はなくて。あって金魚止まり」

ペットの記憶は薄れ、彼女も恋をするようになった頃—

結婚相手となる彼氏と出会った。

初めのうちは年下という事もあってか進展が遅く、当時1人暮らししていた彼女の部屋に上がるまでは、手をつなぐ事すらめったに無かったという。

部屋に入れて少し話し、お茶でもとテーブルの上に彼女が手をついたその時。

「手の甲の上に、手を置くようにしてきましたんです。

それまでそんな積極的にしてきた事は無かったので、びっくりして」

しかし、見ると彼も驚いているようだった。慌てて手を引っ込め、自分の手を見て驚いている。

そこで、もう一度彼女はテーブルの上に手を置いてみた。

「そしたら、また同じようになって。

『え？ え？』って目を白黒させてて」それから、すぐに彼を実家に連れて行った。腕をつかんで、半ば強引に。紹介もそこそこに、その珍現象を両親の前で再現して見せたという。

「な、何が」

ただ驚き焦る彼を前に、彼女の両親は

「娘をよろしくお願いします」

と頭を下げ、彼の混乱を加速させた。

「思い出したんです。あのコのクセを。

両親にはちゃんとお手をするんですけど、私には、ついた手の甲の上に片足を置いたんです。必ず—」

今、彼女には一姫二太郎、2人の子供がいる。

いたって普通の子供らしいのだが、

「でも、どんな犬にも吠えられた事が無いんですね。

猫好きなんですけど、逆に猫にはなつかれなくて……

これって、彼の子供だからですかね」

未だ彼と子供には、“事の真相”を話してないそうだ。

「部屋」

「去年、引っ越したんですけど」
話をしてくれたのは、30代の印刷業の男性だった。

前の部屋はマンションの最上階で、玄関が角になっており、その天井と壁はガラス張りという造りだった。

「日当たりはいいんですけど、真夏や真冬はそれなりに苦労しました」
直接日差しが入るのはいいのだが、炎天下ともなれば遮光シートを張らねばならず、極寒の日は結露対策に頭を悩ませた。

「で、そこは角なので余地というかベランダのようなところがあったんですけど」

恐らく業者しか出入り出来ないようで、居住者は入れない造りになっていたが、そこにいつの間にか蜘蛛が巣を張っていたという。

「女郎蜘蛛っていうんですかね。
お腹がまだら模様の……
かなり大きな巣でした」

最初は気味悪く思ったものの、ガラスで仕切られているので別段入ってくる事はない。

「で、しばらく放置というか……
まあ手が出せるわけでも出す気もないので、放っておいたんですよ」

だが、玄関に入れば否応でもそれは見える。出かける時、帰ってくる時—
時が経つにつれ慣れというか、愛着のようなものもわいてきたという。

「でもね、1年くらいでいなくなっちゃったんです。帰ってきたら巣が破けていて—
鳥か何かにやられたのかな、って」
いなくなっても困る事は無いが、寂しく感じたという。

そしてその夜、蜘蛛の身を案じながら布団に入り、眠りに落ちようとした時—

「何かね、布団がこう、ふわっと浮き

上がったんです。

猫とか犬とか、小動物が入ってくる
ような感じで」

そして寝入った彼は奇妙な夢を見た。

真っ白な着物を着た女性と一緒に布団で
眠っている。

ただそれだけなのだが、それを不思議とも
思わずに一緒に寝続けた。

それからすぐに引越したのだが、次の部屋も
また窓から蜘蛛の巣が見えるようになった。

やはり女郎蜘蛛で、引っ越してから1ヶ月も
経たないうちに巣を張ったという。

「その女性の夢は、かなり疲れた時に見る
ようになりました。

なぜかはわかりませんが、夢を見た後は
すごく心身共に回復しているというか……

これっていい事なんですかね」

師匠に話してみると、今は大丈夫だろう、
との答え。

「今は？」

「そいつは独り身だろう？」

大丈夫だ、その間は。

……しかし、今結婚率が下がっている
って言われているけど、もしかしたら
こういうのも原因かもなあ」

そう言って初老の生臭坊主は下品に
大笑いした。

「許可」

「もう30年ほど前の事になるかなあ」

某大学で客員教授を務める初老の男性から聞いた話。

「古典や民俗学の資料集めを中心に、研究していたんだが.....

まあ、学生時代から現地派遣や雑用を主にこなしていたら、いつの間にか」

客員教授というのは正式な職ではなく、一応教授クラスの待遇はしますよ、だからウチへ来て下さいと大学がお願いするものらしい。その彼が若い頃、ある山村で研究を行う事となった。

対象はその地域の土着信仰。

こういう場合、まずは自治体の許可を求め、それから始める事になるのだという。

しかし、その村は少し変わっていた。

「まずは『泊まれ』と言われて。

日数はそれなりにあるけど、時間は有限だし、『先に許可だけ頂けますか?』と聞いたんだけど」

『それはこちらが決める事ではない』

『とにかく泊まるように』

と返され、これ以上は話が進まないと感じた彼は、仕方なく泊まる事にしたという。

昔は土豪であったろう民家の、十畳ほどの居間に寝ていると、何かの気配がして目が覚めた。

「顔が、逆さまに視界に入ってきた」

仰向けに寝ていた自分の顔を、頭の方から見下ろす形で、女が立っていた。

白無垢の真っ白な着物を着て、その長い髪を重力に任せて垂らしている。

この家の家族か? とも思ったが、村に入ってから若い人間は見ていない。

そもそもこんな時間に、このような形で見に来る事自体不自然だ。

と、女がしゃがんだ。

顔がっすそう近くなり、その表情までわかるくらいの距離に。

そして口元がゆがんだかと思うと、その手が自分の胸に触れた。

布越しではあるが、まるで氷をあてられたように冷たく、そのまま意識を失ったという。翌朝、気だるい体を引きずって朝食を頂き、昨夜の事を話そうかどうか迷っていると、その宿の主である老婆が先に口を開いた。

「一晩中鈴が鳴っていた。

よほど気に入られたようだ。

しかし、好みのわからん事よ」

鈴の音など、彼は一度も耳にしていない。

ポカンとしていると、さらに

「もう許可は出た。

どこでも好きに調べていくがいい」

と付け加えてきたという。

「今でも時々夢に出てくる。

.....あれが原因とは思いたくないけど、

もしそうなら、責任取って欲しいもの

だよ」

未だ独身の彼は、ぐちるようにつぶやいた。

「初めて」

ある広告代理店に勤める男性から聞いた話。
彼は近く結婚が決まっており、相手はお互い
初恋同士とあって、周囲から冷やかされて
いた。

「でもね、彼女の方は僕が初めての相手とは
思っなくて」

そう誤解されるのも無理は無いんですけど、
と彼は話し始めた。

彼の母方の実家は長野で、春休みや夏休み
など、長期的な休みがある時はよく里帰り
していた。

「母方の家は女系というか……

とにかく実家から親戚にいたるまで、
女が多かったんです」

母親は4人姉妹の長女、また親戚の子も
姉妹か1人娘で、彼の存在は一際目立つ
ものであった。

「だから遊び相手は年上だろうと年下
だろうと、みんな女性で。

そんな中、同じ歳で一番仲の良かった
子がいたんです」

今考えると、その子と2人きりで遊ぶか、
その子以外の複数人で遊ぶかのどちらか
だったという。

また、やんちゃだった彼はイタズラを
しては、古い土蔵にお仕置きとして
よく閉じ込められた。

「そんな時でも、彼女は土蔵まで来てくれて
いました」

ある時、よほどひどいイタズラをしたのか、
土蔵に夕食抜きで閉じ込められた。

土蔵の壁には一応格子付きの窓があり、
そこから外とコミュニケーションを取る事が
可能で、そこを通じて彼女と会話した。

「僕が何か物を踏み台にして顔を出すと、
彼女もそれに合わせてくれて。

……で、その時の彼女はやけに無口で、
ちょんちょんと指でつついてきて」

何だろう、と思って格子に顔を近づけた

途端、唇が重なった。

舌で口をこじ開けるようにして、何かが押し込まれた。

「煮物のじゃがいもでした」

口を放した後、かんでそれを飲み込んだ。聞くと、食べ物を持ってきたかったけど、見つかるとマズイので口の中に隠してきたという。

「その時はふ～んとしか思ってなかったんですけど。」

まだ小学生くらいの頃でしたし」

それからというもの、2人でよく食べ物を口移しし合ったという。

「でもですね。どうもその子、親戚の子じゃなかったみたいなんですよ」

思い当たるフシはあった。

そこの田舎では夜になると極力外には出ず、親戚か知り合いの家に行けばそのまま寝てしまう。

しかし、その子は家に泊まった記憶が無かった。

何度かどこの子が聞こうとしたが、会う時には何故かそれを忘れて、またどうしてもよくなってしまい、最後まで聞く機会は無かったという。

高校に入学したあたりから次第に彼女と会う回数も減っていき—卒業後に一度出会ったのを最後に、二度と会う事は無かった。

だから『女の扱い』には長けており、そこがなかなか今の彼女に信用されるまで、時間がかかった。

ちなみに、和服を着ていたとかそういう事は無く、いたって普通の洋服を着たセミロングの子だったという。

「で、でもですね。」

少なくとも『生身の』『人間の』恋人は今の彼女が初めてだったんですよ」

……言い訳に聞こえなくもない。

「戸」

民間の児童向けカウンセラーをしている女性から聞いた話。

主に摂食障害系の児童を診てきた彼女は、原因を探る過程で、いろいろな話を聞く事があるという。

ただ、相談者のプライバシーは守らなければならないので、いくつかぼやかしておく、とは断っていた。

「その子は何か特殊で。

自殺未遂で連れてこられた人でしたけど……」

10代後半の女性で、思春期でもあり、思い悩む原因はいくつも考えられた。

しかし、彼女の口から出てきた言葉は—
「無いんです。何にも。

いわゆる恋わずらいとか、家庭の事情とか、そういうものが何にも」

見ると外見はそこそこ、細身とは言い難いが別にダイエットが必要なほどとも思えない。

連れ添いで来た母親に聞いても、とても自殺を抱えるほどの問題があるとは感じられなかった。

しかしどこか当人の口が重いと感じた彼女は、母親に席を外してもらう事にした。

2人きりになれば、情報をオープンにしやすい。

やがて少女の口が開き、言い辛そうに一言二言、ぽつぽつと語り始めた。

「お父さんにもお母さんにも言ったんですけど……誰も信じてくれなくて。

私も、夢と言われたらそれ以上は……」

どんな事でも真面目に聞くから、と彼女は話をうながした。

「戸が……木の引き戸があったと

言うんですね」

少女の家は郊外にあり、少し離れると畑や川などの自然に囲まれていた。

散歩をしていた彼女がふと横の藪を見ると、

戸が見えたのだという。

ただ、おかしいのはあるべき家が無い事。

木製の引き戸だけが、そこに何の支えも無く、普通の家の戸のように立っていた。

「不思議に思って見ていると、その戸が開いたそうです」

開いたその先には藪とは別の空間が広がっていた。

当たり前のように屋内の、畳の和室。

その中央に誰かが座っているのが見えた。

「昔の猟師？　　というか、毛皮で出来た着物をまとっていたそうで」

しかし、中身はと言うと、まだ12、3才と思える少年だった。

着ている物とは対照的に細面で髪は長く、最初は男だと思わなかったらしい。

しばらく話し辛そうにしていたが、手招きされ、ふらふらと戸の中へ入っていき、少年の前に座った。

「逆らえないとか、そういう事ではなく、ただ自然にそうしたとしか言えない、そんな事を言っていました」

少年は目の前に座った彼女の手を取ると、そのままさらに奥へ連れて行った。

そこには、余りにも巨大な木のテーブルがあった。

少年は彼女を座らせた後、当然のように隣へ腰を下ろし、肩を抱く。

そして何か話しながら湯のみを渡してきた。それを飲んでから記憶を失い、目が覚めると病院のベッドの上だったという。

「農薬を飲んだらしいんです。

見つかった場所は農具入れの小屋で、そこで倒れていたと」

それで自殺未遂と判断されたのだが、当人には自殺する理由も何も無く、またこの事を話しても信じてもらえないため、カウンセラーに診てもらう事になった……という流れらしい。

「そうになると、ねえ。

自殺の再発防止をしようにも、そもそも当人に自殺する動機も何も無かったん

ですから」

もっと社交的になるか、恋人を作れば
両親も安心するのでは—と話すと、
目を輝かせて、

「じゃあ、ある程度娘さんの好きにさせて
あげなさいって、両親に言ってもらえます
かって。全くもう、とは思いましたけど」

ただ、それで気が済むならと承諾。

両親も一も二も無く同意し、笑いを
かみ殺しながら、その少女は帰って
いったという。

1つ、その少年が湯のみを渡す時に
何を言ったか気になったのだが、

「それはどうしても思い出せなかったって。

でも、思い出せなくて良かったんじゃ
ないんですかねえ」

後日、師匠にその事を話すと、お前より
よっぽど悟っているな、と笑われた。

「好み」

バイク乗りの知人から聞いた話。

彼は今でこそ大手の営業だが、若い頃は
いわゆる『ブラック』と呼ばれる会社で
働いていた。

基本的に、プライベートなど考えない
人間でないと出来ない、労基法は元より、
人権侵害レベルを耐えられるほどでないと、
勤まらないと言っていた。

「3ヶ月くらいかな。

丸1日お休みをもらえたのは3回くらい。
で、当時付き合ってた彼女と別れちゃって
……」

電話がつながらなくなり、彼女に会いに
行くよりも脱力感が体中に染み渡り、
半日ほど動けなかった。

「……そこから起き上がると、今度は
バイクにまたがって。

もうどうにでもなれ！ って感じで、
どこかの峠を飛ばしていました」

途中、その峠の入り口の売店で一息
ついたが、年配の店主から

『公道ならいいが、山道に入るのは
今日は止めておきなさい』

と注意された。

何でも、山に入ってはいけない日だか
何かと説明された。

しかしその時の彼には逆効果で—
あえて舗装されていない道へ道へと
バイクを乗り入れた。

気がつくと、日中とはいえ薄暗い林の中の
あぜ道を走っていた。

道がどんどん悪くなるのは理解していたが、
それでも引き返す気持ちは起きなかった。
さすがに道が茂みに変わり、道とは呼べなく
なった時点で、彼はバイクを停めた。

改めて周囲を見渡すと、その周囲と相容れ
ない物が視界に入り、彼の動きと視線を
止める。

白い何かが……よく目をこらして見ると、

どうやら着物を着た女性のように見えた。

「まだ日は高かったですし、幽霊では
無いんじゃないかなあ……と」

元々自暴自棄でもあった彼は、妙な度胸と
冷静さでその女性のいる場所へと向かった。
距離にして20メートルほど近付くと、
やはり女性である事が確認出来た。

「向こうもこっちに気付いたみたいで。

クルッと振り向いたんですけど」

目鼻立ちは普通、というより、顔の輪郭が
体毛に覆われていた。

さすがに顔全体が毛むくじゃら、という
ほどではないが、どこかのミュージカルの
顔部分だけを出した着ぐるみのように思えた
という。

「で、お約束でダッシュでこちらへ。

おおいかぶさるようにして来たんで、

背中を地面に打ち付けてしまって」

それでも、自棄になっていた彼は彼女の
異様に長い爪や匂いに関わらず、その目を
ジッとみていた。

どうも今まで襲ってきた獲物と違う—
一瞬動きを止めた彼女に向かって一言。

「いいねえ、アンタ好みだよ」

その言葉の意味を飲み込むまで時間が
かかったのか、沈黙が流れた。

そして嘔みつかんばかりに重ねていた
上半身を引き起こす。

その顔は真っ赤に上気したように見えたと
いう。

そのまま押し倒し返すようにして、その
女性と対面で座り込む形となった。

真っ赤にした顔でうつむきながら、ボソボソ
言っていたが、よく聞こえない。

それからの記憶は途切れているという。

夜の冷え込みに目が覚めると、女性は
消えていた。

ただ、荒々しい獣臭と、だるさが体に残って
いたという。

「山の神様は顔が酷いっていうけどさ、

今の基準なら結構イケルんじゃないかと

思っているんだが」

ちなみに、40後半になる彼はまだ独身で、
休日のツーリングは止める気は無いそうだ。

「男女」

「いい話かどうか分からないですけど」
富山から上京してきた女性から聞いた話。
今は簿記を学んで一企業の経理を勤めている
彼女だが、高校まではバリバリの体育会系で
男性より女性に人気があったほどだという。

「髪もジャマだからショートで、肌も
日焼けとか気にせずに真っ黒。

「今じゃ考えられないですけど」
そんな彼女が小学生の頃、家に遠縁と名乗る
同じ年頃の少女が訪ねてきた事があった。
あいにくとも両親が留守で、彼女1人で対応
したのだが、

「あなたのお嫁になる者です。

どうかお父上にお伝えを」

何が何だかわからなかったが、その時は

“女同士でも結婚出来るんだっけ？”と

見当違いの事を考えていた。

しかしいくら考えても納得いくはずもなく、

どういう事ですか？ と質問すると、

「お父上に伝えればわかります」

と返し、後は自分の顔を父親似とか、

褒めているような事を言っていた。

（口調が時代劇のセリフのような感じで、
詳しくはわからなかったらしい）

「あのう、女の子同士でも結婚って
出来るの？」

そう言った途端、相手は目を丸くした。

そして彼女の顔をジッと見つめ、

「髪が短くありますが」

「動くのにジャマだから」

「手も足もその……それだけ出して」

「半ソデと短パンの事？」

続いて二言三言交わすと、その少女は
フラフラと出て行ってしまった。

それからすぐに両親が帰ってきたので、
彼女は今まであった事を話した。

「まさか、そんな」

父親の顔色が見る見る青ざめていった。

その夜、母親と彼女に事情をした。

「何でも子供の頃、川で溺れかけた事が
あった時に、神様か何かわからないものに
助けてもらった事があったんだって。

ただ、助けた理由というのが」

父親というのが、子供の頃からかなり美男。

→助けてやったのだから結婚しろ。

→でも人間と違うから結婚は無理だな。

→お前の息子なら美男だろ。

→息子が生まれたら、人間の姿で現れるから
それを婿によこせ。

(なるべく本人談を再現しております)

という流れだったらしい。

まあ、娘ならその約束は無効ですよ、

と言うと

「アタシ、弟いるから」

彼は無事でしたか？ と聞くと、やはり

彼女と同じ小学校高学年くらいの時に、

同様の訪問者があったらしい。

状況も同じく、1人で対応。

ただ、その時

「アタシも出かけていたんだけど、

アイツ、アタシよりも女顔で、よく

女の子と間違われてたんだ。

その時も、ちょっとイタズラして」

昼寝していた弟の顔に化粧をして、

それから遊びに出かけたらしい。

気付かずにその姿のままで訪問者に

対応したところ、

「ま、また……」

一目見るなり、そう言ってそのまま帰って

しまったらしい。

年齢は幾分か上がっていて、ちょうど

自分（姉）と同じくらい、そう弟は

言っていたそうだ。

「そういうのって、神様はわからない

ものなんですかね」

ちなみに、一度目（姉）は普通の洋服で、

二度目（弟）はリクルートスーツで現れた

との事。

細面で、絶世の美女とまでは言わないが、

弟いわく結構キレイな人だったそうだ。

取り合えず約束は息子限定だが、孫の代まで

延長されないか、それが一家の気がかりだとい
う。

「髪」

聞いた話。

誰しも幼少期の頃は、納得のいかない、説明の出来ない経験を

一度か二度はした記憶があると思う。

「まだ幼稚園に上がる前だったと思うんですけど」

そう話し始めたのは、お寺に来た未婚の女性だった。

髪を肩口で切りそろえた彼女は、幼い頃の記憶が、10年ほどして蘇った時の事を話してくれた。

「公園で遊んでいたんですが、和装……というんでしょうか。

着物を着た、あまり年の変わらない子供達が誘ってきたんです」

男の子も女の子もいたが、彼女は彼らに混じって遊んだ。

そのうち、相手の女の子が着ている着物が、たまらなくうらやましくなってきた。

「いいなあ、いいなあって。

その中では、自分だけ普通の洋服でしたから。

触らせてもらえたけど、やっぱり自分でも着てみたくなっちゃって。

でも、さすがにそこまでは言えなくて」

それを見ていた男の子の1人が、彼女に言った。

「そんなに欲しいの？」

「うん！」

元気良く期待を込めて答えると、彼はついつと彼女の顔に自分の額を寄せてきた。

「じゃあ、僕のお嫁さんになったら？

そうしたら着れるよ」

着物につられて—というのもあったが、何よりその男の子が高貴というか、並外れた目鼻立ちをしていたという。まるで少女漫画からそのまま出てきた

ような—

そんな少年から“プロポーズ”された
彼女は、一も二も無く首をぶんぶんと
縦に振った。

「それじゃあ、約束したよ。

それで、僕のお嫁さんになる
方法なんだけど……」

その後、小・中と有名な進学校への道を
進まされた彼女は勉強漬けの毎日で、
約束の記憶も薄れていった。
高校進学の際、それまでの進学校ではなく、
一ランク下の学校を選んだ。それは親への
反抗でもあったという。

「中学校までは校則校則また校則でね。

何から何まで。

で、高校へ入って一番最初にやった事は」
それは“髪を伸ばす”という事だった。
時間が経つのを待つしかないが、それでも
“前髪は眉の上まで”だの、“後ろ髪は
首下まで伸ばさないよう”といった規則に
今まで縛られていた彼女に取っては、
それだけでも“解放”を実感出来る
ものだった。

やがて1年経ち、2年生となり—
髪は順調に伸びて、自慢の長髪は腰まで
たなびくようになっていた。

「その頃からかなあ……

妙に疲れを感じるようになったというか、
疲れが取れなくなってきたのは」
常に倦怠感が体を覆い、なぜか食の嗜好も
変わってきた。

高校生といえばそれなりに肌やニキビを
気にする年頃で、極力避けてきたと言っても
いい油物まで目が無くなり、気持ち悪くなる
まで食べるようになってしまった。

「甘い物は元から好きだったから

ともかく—

唐揚げとか天ぷらとか、とにかく
あるだけ食べる！

みたいな感じになっちゃってた」

日常では相変わらず体のだるさは抜けず、
やがて家に居る時は布団の中、という事が

珍しくなくなっていった。

ある日、目覚めるとイスに座っていた。

そこは家の中ではなく、どこか木造の広い空間だったという。

「ああ、動いてはなりませんよ。

今、切っておりますので」

背後から優しい声が聞こえるのと同時に、痛みが走った。

それは、髪からくるものだった。

ショキ、ジョキ、という音と共に髪を切られていたのだが、まるで髪の本一本一本に神経が通っているかのように、首筋に引っかいたような痛みを受ける。

「もう少しで終わりますので……

仕上げは床屋でやってもらいなさい」

パッパッと背中をはたかれ、ああ、あの長髪はもう無くなってしまったのだと思うと同時に、肩が急激に軽くなるのを感じた。

すると今度は一体何が起きたのか、ここはどこなのかと状況判断に追われ、辺りを見回すと部屋の一角に、心配そうな顔をして座っている両親を見つけた。

「え？ 何でこんなところに？」

彼女が両親に声をかけると、2人は飛びついてきた。

母親は泣いていて、全く現状が理解出来ない

彼女に、また背後からあの優しい声が聞こえた。

「もう大丈夫でしょう。

もう少し伸びていたら

危ないところでしたが」

声の主はそのお寺の和尚さんで、彼女の事も幼い頃から知っていた。

そこでやっと、大方の事情を聞かされたという。

「何でも、朝なかなか起きない私を起こしに来たら、すでに昏睡状態だったって。

それで、慌てて病院に連絡を取っていた

ところ、檀家の和尚さんが現れたのよ」
両親は言われるがまま彼女をお寺に
運び込むと、イスに座らせた。
そして和尚さんが彼女の散髪を始め、
その最中に正気を取り戻したのだという。
「それである男の子との約束を
思い出したの。
『髪を伸ばして欲しい。
それが腰下からしっぽの長さになるまで。
そうすれば、僕のお嫁さんになれるから』
って」

美容院に寄って髪を切りそろえてもらい、
家に帰った彼女は、その夜夢を見た。
そこには、自分と同じくらいの年頃の、
平安風というか綺麗に和装に身を包んだ
少年の姿があった。
中身もまた、その格好に負けず劣らず—
一目で、あの時約束した男の子だと
思ったという。

彼は怒るでもなく、ただ悲しげに
目を伏せると、そのまま背中を向けて
立ち去ってしまった。
その後姿、腰下には、ふさふさとした
しっぽが揺れていた。

「命が危なかったという事ですか？」

「和尚さんの話によると、だけど。

“着物も着れなかったし、おあいこ
ですよ。

それに、向こうはこちらが死ぬのを
待つなんて、カップラーメンに湯を入れて
待っている程度の事。それくらいは我慢
しろと言っておきなさい”

って」

“彼”が夢に現れたのはその一度きりで、
以後は姿を見せていないという。
そしてその日を境に、彼女の体調は回復し、
通常の高校生活を過ごせるまでに戻った。
その後大学を卒業し、現在、社会人○年目の
彼女は、一通り話し終わるとふう、
とため息をついた。

「子供の頃の約束とはいえ、後悔したわ、
あれは」

自分も苦笑しながら、
「まあ、命あっての事ですから—」
すると彼女は首を左右に振り、
「あんないい男を振るなんて……
今からでも髪を伸ばしたら、
お嫁さんにしてくれるかな」
彼女はショートのを髪をなでながら、
残念そうにつぶやいた。

「失う」

師匠の、そのまた知人から聞いた話。
その方も某寺で住職を務めており、
いろいろと人の相談に乗る事があるのだが、
変わった話を聞かせて頂いた。

「3、40年ほど前になりますかな……」
いつものようにお寺に相談に来た人の
相手をしていたが、その人は最初から
どこか奇妙に思えたという。

「何と言ったらいいか……
“足りない”んですよ」
何が？ と聞くと、“人としての構成”と
いうか、条件を満たしていないのだと言う。
どこからどう見ても普通の、20歳前後の
男性に見えるのだが、とにかく違和感が
ついてまわるのだと。

内容は、実は彼の家は資産家であり、つい
先年両親に他界され、一人息子だった彼は
両親の供養と法事について、お寺に相談に
来たのだという。

その青年と話しているうちに、体の動きが
どこかおかしいと感じ始めた。
お互いに座っているのだが、話す時の
身振りに、左腕が全く動かない。

「聞くと、生まれた時から肩から先、特に
ひじから下は全く動かない、そう言って
ました」

先天的なものか—
そう思っていると、それまで他愛もない
世間話程度しか話してこなかった青年が、
口調を変えた。

「左腕はそうです。
……今は、右足にも少し障害が。
多分、もうすぐ右腕か、それとも左足か—
動かなくなると思います」

病気で？ と問うと青年は首を横に振った。
「どうすればいいのか、わからなくて……」
彼には、子供の頃から見る夢があった。
気がつくと、どこか広い洋館の中にいる。
そこには妙齢の女性がおり、彼をいつも

暖かく出迎えた。

時には一緒にお茶を、時には食事を、そして時には一緒にベッドで眠ったという。

不思議な事に、夢の中では彼の左腕は普通に動き、その夢を見る事が楽しみになっていった。

そして日が経つにつれ—

彼は夢の中でも同様に成長していったが、

その女性はその年齢のまま—

恐らく20代後半、外見は日本人だが着物はどこか西洋風というか貴族風で、顔も非常に目鼻立ちが綺麗で短髪。

そのせいもあってか、彼は現実の異性に興味を示さない（示せない）思春期を送ったという。

師匠の知人は“色男”という表現を使っていたが、話をまとめるとその青年も中性的といおうか、今風に言うとビジュアル系の類だったのだろう。

さらに話を進めると、夢の中の彼は現実に合わせて成長していくのに対し、夢の中の女性はいつまでもそのまま—

いつの頃からか、恋人のような関係になっていった。

「それで……どうしたいのですか？

それに、さっき言ったもう片腕や片足が動かなくなるかも、と言っていたのは？ それと関係が？」

口にこそ出さなかったが、彼は夢の中の女性が、自分が成長するにつれ独占欲が強くなっていくのを感じていた。

また、夢の中では全ての健康というか状態がリセットされ、左腕に限らず風邪だろうがケガだろうが、夢に入れば五体満足な生活を満喫出来た。

「今考えると—

幼い時は左腕が自由に動くから、喜んで夢を楽しんでいたと思うんです。

右足が動き辛くなった時も。

だから、もし不自由な部分が増えたら—」

彼女がそれを望んでいる？

出来る能力がある？

そもそも、彼女は何者なのか？

次々と質問をぶつけてみたが、

「……わかりません。

ただ、子供の時から

『ずっとここにいてもいい』みたいな事は
言ってましたが……

最近、それを言う回数が増えてきたような
……」

その後、何度か相談に乗る機会があったが、
両親の永代供養を頼みに来たのを最後に、
来なくなった。

彼が20代半ばの頃だったという。

しばらくして、行方不明になったと聞いた。
人づてに聞いたところ、警察も動いたらしい
が、資産に手をつけてない事、室内にも荒ら
された形跡が無かった事から、事件性は無い
と判断されたという。

「どこに行ったんですかね」

「選んだのは彼ですし、彼の責任です。

彼は彼の出来る範囲で幸せをつかんだ—

という事だと思いたいですね」

救えなかった、という事ではないと思いたい
だけかもしれないですけど……

そう付け加えると、彼はお茶に静かに
口をつけた。

「2人」

聞いた話。

一応、僧侶の修行をした事のある身として、
今でも相談を受ける事が時々ある。

で、同じ修行仲間にして先輩でもある
初老の人から聞いた話。

今から30年ほど前になるが、ある母子が
相談にやってきた。

20代半ばの青年を連れてきた母親が
言う事には、その彼の女性関係について
心配して来たらしい。

何でも、1人として長続きせず、
また別れる原因は決まって浮気。
必ずと言っていいほど二股をかけていて、
もう何度もそれが発覚して別れるという
パターンを繰り返していた。

「この子の父親も色狂いでしたけど……

女手1つで育ててきて、幼い頃以外は
会わせた事もなかったのに。

どうして似てしまったんでしょうか……」

とりあえず先輩は、母親の前では
話し辛い事もあるでしょうから、と
母親を先に帰し、その青年から事情を
聞く事にした。

見た目には美形とは言えずとも
生真面目そうな顔をしており、
彼が浮気を繰り返しているなど
想像も出来なかった。

世間話などして、また自分のそれまでの
相談のケースから、いろいろと話を
引き出そうとするが、なかなか口が重く、
核心には迫れないでいた。

「うーん……1人の女性では満足

出来ないの？

そういう人もいるにはいるけど」

こう聞いた時、その青年は意を決したように
口を開いた。

「違います。ただ、僕は……

2人でなければダメなんです」

1人ではなく、3人ではなく—

どうしても2人という事に彼は
固執していた。

「でも、それじゃ女性の方が
納得しないでしょ」

彼はコクリとうなづきながらも、
顔を上げて応える。

「それでも、僕に取ってはそれが
当たり前だったんです」

それは当たり前じゃないだろう—
とも思ったが、何か引っかかる物を
感じたので、そこを追求してみた。
また彼の口は一段と重くなったが、
ポツリと

「信じてくれないと思いますが」
と話し始めた。

物心ついた時から、父親とは別居しており、
というより最初から結婚自体していない
家庭だったらしい。

いわゆるシングルマザーである。

ただ、住んでいた場所は母親の実家であり、
祖父や祖母に可愛がられながら、
本人としては幸せに暮らしていた。

「“それ”を初めて見たのは—

おたふく風邪の時だったと思います」
熱にうなされながら、昼間、自分の部屋で
寝ていた彼は、ふと部屋のドアが開く音を
聞いた。

祖父は当時まだ若く、母親も仕事勤めを
しており、2人とも昼は家を空ける。
居るのは、必然的に祖母という事になる。
お婆ちゃんが来たと思った彼は、ドアの方へ
視線を運んだ。

しかし、ドアは開いたもののなかなか姿が
現れない。

不思議に思って視線を下へ移すと、
自分と同じ年くらいの着物姿の女の子が、
這うようにして部屋に入ってくるのが
見えた。

親戚の子が来たのかな、くらいに
思っていると—

段々とその子の上半身が部屋に入ってきて、
ただそこからが通常とは違っていた。

当然、上半身が入ってくれば、後に続くのは下半身という事になるのだが—

そこから胴が入ってきて、腕が見え、そして頭が現れた。

「ベトナム戦争の枯葉剤の影響とかで出た結合児の話とかがあろう。

ちょうどそんな感じだったらしい。

腰から対照的に、上半身同士がくっついていて、そんな状態の女の子が入ってきたんだと」

その時の彼はそれを不思議とも何とも思わず、

“ああ、こういう子も中にはいるんだな”
くらいにしか考えなかった。

まだ幼く、熱で呆然としている頭では考える余裕が無かっただけかも知れないが。彼の方は高熱のせいか視点がなかなか定まらず、時折り視界に入る彼女“たち”をながめるのが精一杯だった。

また、彼女らも彼にチラチラと視線を送るが、反応が無いと見ると、元きたドアから出て行ってしまった。

「それが最初の出会いで……

それから、彼女たちは良く私の部屋に出てきました」

それは昼夜を問わず、ただ彼が部屋で1人きりである時に現れるようになった。

彼女たちは壁と言わず天井と言わず這い回り、こんな事も出来るんだなあと思わなく、ただ気にもせずに過ごしていた。

そんなある日、布団に入って天井を見上げてみると、また彼女たちが姿を現した。

ふと、彼はずっと彼女たちを視線で追う事にしてみた。

いつもと違う様子に彼女らは戸惑った感じで—

「ね、もしかして見えてる？」

「気付いてないと思うよ？」

そんな彼女らの会話が聞こえてきた。

しゃべれたんだ、と妙に感心していると、

今度は彼女らの1人が彼に話しかけてきた。

「ねえねえ、もしかして私たちの事、
見えてるの？」

彼は彼女たちから視線を外さずにコクリと
うなづいた。

それを見て、“2人”は文字通り顔を
見合わせた。

「ほら！ 見えているみたいだよ！？」

「えっ！？ 本当に？」

するすると、天井から壁に沿って、彼女らは
布団の近くまで降りてきた。

彼は上半身を起こしてその2人と対峙した。

そして彼女らは、彼を質問攻めにした。

いつから見えていたのか？

他の人に自分たちは見えているのか？

この部屋以外で見た事はあるのか？

彼も素直に質問に答えた。

おたふく風邪で寝込んでいた時から
見えていた事—

他の人には多分見えていないだろう
との事—

この部屋以外では見た事がない
という事。

それを聞いて彼女たちも半分興奮し、
もう半分はどこか納得した様子で
聞いていたという。

それからというもの、彼は自分の部屋で
よく彼女たちと遊ぶようになっていった。
ただ、その“体”の制限上からか、よく
彼女らは交互に彼と話そうとクルクルと
腰を軸に回転し、彼もまたあまり彼女らに
負担をかけまいとして、2つの頭を
行ったり来たりしながら遊んだという。

「不思議なのは……

いえ、全てが不思議ですが、
彼女たちは僕と同じように成長して
いったのです」

やがて思春期となり、彼女たちも年相応の
意識を持つようになっていった。

“仲の良い”関係は、“恋人”へと自然に
格上げされ、名前の呼び方も“～ちゃん”
から“～さん、～君”に変わったという。

彼が大学に進学する事になった時、

家を離れる事を彼女たちに告げると、自分たちはそこまでついて行けない、と応えた。

「卒業したら、必ず戻るよ」

そう彼は言ったものの、上京して半年ほどで、同じ大学の恋人が出来て情を交わしてしまった。

正月に実家に戻った時、彼女らは現れず、“終わったかな”と思い、寂しいながらも諦めがついたらしい。

それ以来、彼女たちは現れる事はなかった。そして一常に2人の女性を恋人とする彼の偏愛歴が始まった。

「分かっているんです。

“彼女たち”が僕に愛想を尽かした

ように、他の女性も—

“自分だけのもの”と思って

いるんですから。

でも、僕は……

2人じゃないとダメなんです」

結局、事情はわかったものの

どうする事も出来ず—

「話は分かったけど、結婚は出来ないよね。

重婚は犯罪だから……

いずれは全てを認めて、受け入れてくれる

女性が現れるかもしれないけど、

正式な結婚は諦めるべきだね」

彼は当然というように首を縦に振って、

丁重に礼を述べて帰っていった。

「しかし、30年、ですか。

でもどうしてそんな古い話を？」

そもそも、何か話は無いかと振ったのはこちらなのだが。

指をアゴにあててしばらく考えていたが、その少しシワの入った手を置いて、語り始めた。

「つい先日、似たようなケースを

相談されてな」

シングルマザーで、息子の女性遍歴についての相談。

しばらくは忘れていたが、そこで記憶の糸がふとつながった。

彼もまた、「2人でないとダメ」という
主旨の事を話していた。

「もしかして、と思って
たずねてみたんだが—」

その異形のモノについて心当たりは無いが、
そう聞いたところ、彼は目を丸くして驚いた
そうだ。

どことなく面影も、過去に相談しに来た
青年と似ていて—

「彼の息子だな」と直感したという。
とはいえ、確証も無いし相談しに来た人間の
プライバシーもある。

「同じようなケースを知っていてね」
と誤魔化すと、向こうもそれ以上は
追求してこなかった。

ただ、その彼自身はどこか合点がいったと
いうか、憑き物が落ちたような顔をして
帰っていったという。

「これはあくまでも推測に過ぎんが—
昔相談しに来た青年の父親も、単なる
色狂いではなかったんじゃないかな」
ふっ、と視線を落とすと、タバコをくわえて
火をつけ、

「化け物というのも、難儀なものだよなあ」
煙を一息、何も無い中空に向かって
吹きつけながらそう彼はつぶやいた。